広島文教女子大学紀要　44，2009

【原著】

相 繰 り 込 み

吉　田　裕　午

Renormalization of Sou (Laksana)

Yugo Yosida

キーワード：相，繰り込み，意味空間，体相用，思考の正四面体，オントロジー，
ナレッジナビゲーション，多次元マトリックス，転識得智，十如是，
シンメトリ，相即相入，三密，密厳，還相，メタファ，信解，果可分

1. は じ め に

「相　laksana」とは，「姿」「形」，あるいは，外見や徴候を表す言葉である。「相」のつく用語は多いが，存在情報（心を含む），特にメディアの扱いに着目する時，「相」の重要さを再認識する。また，「繰り込み」については，生成的・包括的概念として，著者の過去の論文[2-16]でも注目してきた。今回の相繰り込みのねらいは，気づきの再発見とともに，意味空間に言葉を見つけ，それらの関係の流れを辿り，雰囲気の色彩を添え，果としての甘露を今に味わい，未来を描くことである。また，特性や機能に要素還元する分析的手法の行き詰まり，相対主義や原理主義の対立という典型的な現代の問題構図を克服しようという目論見もある。

これらの内容と扱いについては，既に真言mantra・唯識vijnapti-matraなど仏教の智慧が多くのヒントを与えている。出世，方便，用心，安立，路地，習性，機能，開発，相続，成仏，化生，醍醐味，意地，引導など，知らず知らずに使っている言葉にも，その深い意味が込められている。その古代からの智慧の中に，宇宙の構成要素のメタファとしての成長・拡大・自由を表す「風Vayu ヴァーユ」があるが，この流れは特にイノチやメディアとの繋がりが深い。また，相繰り込み論を展開するにあたり，その存在を示す「体相用」の「相」に特に着目し，書き下ろしの筆として，以下の説明にたびたび参照する。なお，「体artha」は本体（本質），「用krtya」は作用（はたらき）の意味合いに焦点を当てている。而今の心という，その時代その場所の雰囲気を込めた意味について，以下に述べる思考の正四面体に，混色ではなく虹のまだらに，言葉の絵の具の色ニュアンスを重ねながら考察し，幾何学的記述に心がけた。

数式表現では，$x_i=f_i(x;a)$の再帰構造に込められた「相」を追究する。なお，x_iは，各私（個，自），f_iは個々の射影（関数）関係，x は公（私の集合），a は時間を含めた諸々の環境パラメータ群を一般的に表現しているが，鏡に映るような再帰構造に注意する。もっとも自然な平均場的な近似（捉え方）は，没個性ではあっても，委ねる感覚の$x_i=f(a)$であろう。その意味は，自分の運命は環境や拘束条件下の制御ですべて決定されるとするが，むしろ，人（自，他）が環境を大きく変えている場合に反省が必要である。その捉え方を，次の内容にも注意しながら探っていく。異熟vipaka（時間の遅れ）や，遺伝・進化プロセスも面白いテーマだが，脳科学や精神物理学を含む先端科学技術を扱う少数者の独断的な振る舞いによって，それが全体に及

ぼす危険性が非常に増大していることにも留意する。また，今日的テーマとして，持続可能で再帰的な社会観，人生観を確立し，個の暴走を防ぎ共に愉しく過ごす解決策にも注目している。これは，品格やEthosエトスとよばれてきた内容の復権にもなっている。なお，視覚に直接訴える幾何表現に曼荼羅mandala（mandara）があり，その意義を相繰り込みより確認する。

また，「概念・用語の明示的な仕様」と定義されるOntologyオントロジー（存在論）に活かし，知識の蔵あるいは脳をイメージとする人工知能や情報ネットワークの世界に当てはめ，知識社会のナレッジナビゲーションとする狙いもある。さらに，いわゆる形容詞の扱いにもアイデアを提供する，多次元マトリックス意味モデルのアイデアを，新たな「識vijnana」の止揚と「智jnana」の獲得に活かし，「覚duddha」への道を探る。分別vikalpa・融合samagriされた情報群を意味のコスモスに繰り込み，繋がりや流れも絡み取られた全体像「相繰り込み」として捉え，未来の創造に活かす。

以下，思考の正三角形，および，大乗mahayana的止揚として，思考の正四面体およびその止揚が登場するが，略号および基本的意味合いは，次のNAV表のようになる。類似形態のフリーメイソンに出てくる「Eye of Providenceプロビデンスの目」なども同様の意思を伝える示唆を含んでいると思われる。

略号	類似品詞	別名	情報関連用語	進化対象	特　　徴	例
N	名詞的体	モノ	オブジェクト	形態・構造	量・強さ・可能性	単語，句，文章，結合
A	形容詞的相	ココロ	クオリア，ミーム	識	智慧・メタファ	感覚，品格（鏡），情報
V	動詞的用	コト	エージェント	機能	変化・指示	流れ，速さ，力

留意点として，思考の次元を上昇させる過程で出会う内容に，４要素以上の集合では，分類を射影平面に単一領域として表示できないことがある。種々の様相（情報）をもった島がまさにワープで繋がっているが，仮想現実，自己言及，元型言語，否定の否定，量から質へ・相互渉入・止揚・螺旋的発展などの，進化のプロセスを含めた評価や情報整理活用法（情報を活かした使い方，アイデアプロセッサ，ポートフォリオなど）も活用の視野に入ってくる。

相の図解として，物質の状態をコントロール空間に描いた相図phase diagramがある。それに臨界状態や急激な状態変化カタストロフ面を図示できるように，意味空間に言葉の星座群を配置し，黄道や白道のように，多くの人生が辿る道やいろいろな思考経路を描き，同様の解析と予測を行うことができる。転識得智（識を転じて，智を得る）といわれるが，コントロールが自在になれば，瞬時に意味空間を移動（即に横超）することも可能になる。それぞれ繰り込み的な相似構造をしているが，まず大きな捉え方を，次のように密教esoterics・唯識からのヒントに求めることができる。

2. 十 如 是 と 相

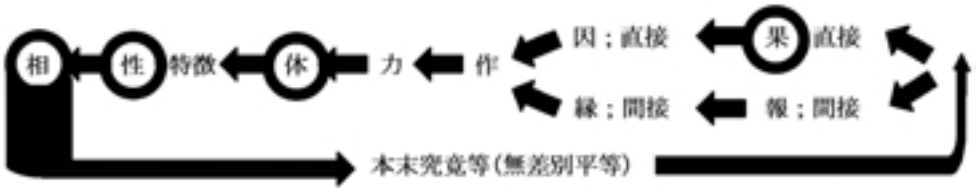
鳩摩羅什が訳出した「法華経」方便品に，十如是という捉え方の循環流がある。この如是evamを諸法実相（存在の真実の姿）ともいい，一念三千の基礎ともいわれる。なお，究極の姿（真如，法如）も，一念NAV繰り込み，すなわち，さとり（智，bodhi菩提，聖，所識vijnapti）・さとった（覚，仏の）・さとる（識，buddhi仏陀），という，空（N）・仮（A）・中（V）に絡み取られるとする。「不可得」や「超」「極」「微」「離」「不」なども同義的ニュアンスを込めてさらなる識の上昇を目指している。一旦描いてその絶対を否定し，さらに上昇を目指すこのよ

うな「無」性プロセスに，繰り込み自由度が増し，さらに自在になっている。

体（N）に着目すると，（潜在）能力としての質量，エネルギー，Affordanceアフォーダンスいわゆる「できる性」などが，存在の源（繰り込まれた点）を主張する。ただし，意味空間においても同様であるが，その存在の認識には，何らかの信号の受発信や反射が必要である。物体（モノ）としてやって来なくても，メディア（媒体）を伝わる波動（情報）があればよい。音（声）や色（光）が原初的であるが，通信ネットワークメディアも存在を伝えている。また，モノは時に情報を遮る壁となって影をつくり，無意識も識として大きなはたらきをするのは周知の通りである。認識のカタチについては，五蘊skandha（色，受，想，行，識）の考えがあるが，仮想や展開との関わりを含め，後に考察する。特に，識のカタチは思考空間の次元上昇と深く関わっている。

用（V）に着目すると，関係の向きに展開された，辺（繰り込まれた線）が際立ってくる。辺であっても，Entrainmentエントレインメント繰り込み[14] された太い関係が，力学的記述の科学を越えた法dharma（dhamma）の扱いを想起させる。まさに，機能は関数functionと同じ綴りであり，活動は作用actionと同じ綴りで，意味空間の路や交差点付近で生成・消滅するコトをメタファとしている。人工のコトの辺がまさに明滅する活動の表舞台であるが，立体（業，羯磨karma）を成り立たせる，裏方としての辺や面が支えていることに留意する。また，繰り返された「行」や因縁果報でエントレインされ際だった襞ル・プリや輪郭エッジの用の辺にも着目する。また後に，「我」の分離や対立現象の由来となる，異なる路パス群でできる相（層）を成所作智⑸より探る。なお，括弧内の数字は，識のレベルとの対応による。

相（A）に着目すると，色や情感に多様さを込めた，雰囲気（繰り込まれた面）が伝わってくる。その謂いでは，輪郭や因果関係の人工的でシャープなカタチを再検討した，レオナルド・ダ・ヴィンチのSfumatoスフマートを想起する。「私」の前にたちまち見えるのは，自己の創造物を含め，景色や音の連なりの現象あるいは表象である。自然の再帰フラクタル構造が生き物に優しいことが認識され始めているのと同様，目を転ずると既に，各種曼荼羅として，各相が関連性をもって存在している。最終的な気づきは同じであっても，まさに，「私」の前にある相を十如是図の流れのどちらに辿るかで，その醍醐味が相違し，三昧という言葉にもその豊かな意味合いが表現されている。



3. 三　密　と　相

進化という繰り込み[15] で指摘されたように，点・線・面繰り込みの由来と発生順に留意しながら，区別のアンダーバーと数字を添えて，Nの分裂が体NとVの芽V0(N1)を，Vの分裂が用VとAの芽A0(V1)を，Aの分裂が相Aと新しい芽２(N2，A2，V2)として認識させる。なお，繰り込みは，いずれにおいても実行されるが，明示的に，体に注目して繰り込まれた点をN・A・V，用に注目して繰り込まれた線をN・A・V，相に注目して繰り込まれた面をN・A・Vと記述する。繰り込み点の名称が複数あるのは，用のジョイントのための小さな面を明示するためであり，高次には一つの名体としてNAVの区別はなくなる。始めの体の中の隠れた

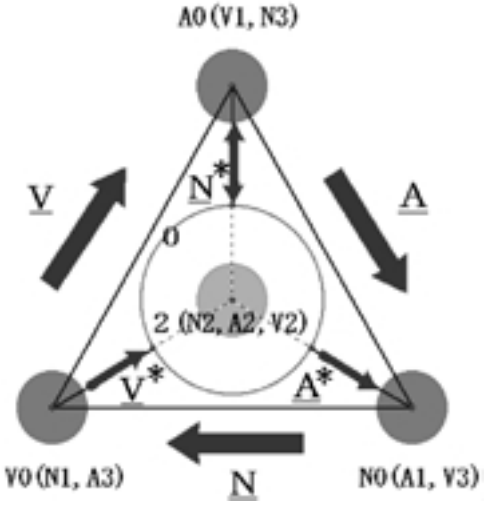
構造は，とりあえず，暗黙の内部空間あるいは枠として，身体（気分，隠れた欲求などを含む）という体N に絡みとられ，後で述べるように，「識」表記では，端が前五識⑸N0，意識⑹N1（V0）となっている。これがまさに，「有情（衆生）」とも釈されたsattvaに込められた人の「苦」という痛みの発生由来を示している。

ここで，密教や唯識をヒントに，カタチに現れた認知や行動などをシンメトリに整理してみる。ちょうど，レゴブロックのように，どの辺（用）に使われるかで，際だつ面（相）が異なることに注意する。特に，後述するように，A1（N0，V3）という捉え方は，まさに，即身成仏としての内証（賜物，相即相入）を示し，三昧面の要になっている。

用大あるいは三密とよばれる思考の正三角形がある。三密とは，仏の身口意（kaya, vaca, citta）の３つのはたらき，および，相応する衆生の三業をいい，それらが一致することを「無相の三密」，身に印を結び，口に真言を唱え，意に本尊を念ずるを「有相の三密」とよんでいる。また，密教の由来である「密」に「如来の秘密」と「衆生の自秘」があり，相手に合わせて（等流に）伝える表現が変化する方便と，自身に秘められた「ありのまま（仏）」があると指摘されている。ウソをつかれるのと，真実を知って認める（許す）とは，秘密の意味が違う感覚がある。この究極を，空海は密厳（秘密荘厳）とよんでいる。

吽字義に曰く，
如来有智の画師は，既に了知し已って，即ち能く自在に大悲曼荼羅を成立す。
是に由って言わば，所謂，甚深秘蔵とは，衆生自ら之を秘するのみ。
仏の隠有るには非ず。是，即ち阿字の実義なり。

図のように，隠された意味も込めて，有情あるいは「個」の，用としての「身」を底辺N＝N0－N1において，衆生の三業（有相の三密）の残りの２辺を，口V＝V0－V1と，意A＝A0－A1にあててみる。さらに，身モノNの分別方向に口コトVを，融合方向に意ココロAをあてはめ，識の上昇流を右回りに描いてみる。なお，この流れを自力的な地動説とみなすと，他力的な天動説ともいえる左回りの流れと十如是はよく合致していて，大きな流れの中にある小さな水車として，人々の営みが捉えられる。また，循環流の帰還の仕方やバイパスも後の課題として扱い可能となる。



思考の正三角形の中央に，真理（仏，真如，法如，理趣naya）２（後に０に止揚）を捉えてみる。アルスマグナの大舞台にもみえるが，この大いなる対象を「もともとの」あるいは「仏の」と，ここでは表記する。もともとの身口意を図で捉え，有情との口と意の向きつきペアに注意すると，もともとの意V*＝V0－２，もともとの口A*＝２－A1という経路に相当している。類義語を添えてイメージをつくると，もともとの意は自然誘発（欲求行動，発話パロール，迦摩kama，解脱moksa，往相），もともとの口は自然の恵み（仏の声，法身の説教，等流，地や空の大自然認知，還相）などとして，真理からのサインを整理できる。

以上の思考上昇過程は，次元繰り込み[16]でふれたように，「識」の段階（カッコ内の数字で示す）を次元の上昇として表示することにぴったり一致している。すなわち，前五識⑸N0，意識⑹V0，マナ識⑺A0，アラヤ識⑻２，アマラ識⑼０に止揚を記述しており，各辺を般若心経の各「因行証入時」過程と対応させると，０に止揚は時間方向への自在を暗示している。

4.「訶」と　相

無相の三密の実現には，０と２を重ね，原初に帰るのみでよさそうに見えるが，これでは，相A変化もない，ただ論理の歯車で動く機械的な世界（界dhatu）になってしまう。ここでは，羯諦あるいは「苦」N「集」Vと称されたその路パスの解決策を，空海の吽字義に探ってみる。「風」「識⑼」「阿閦」などの表記に「吽」字が当てられることがあるが，空海はサンスクリットの「吽humウン」種子bijaを，訶haカ・阿ａア汙ｕウ麼maマと分別・融合して，意味を深めている。「風」の色は，「黒（無色）」とされているが，aumアウマを繰り込むことによって，何もない「無」の世界が豊かになる感覚がある。なお，同様の「唵オン」種子は，インドで古来より，識の流れあるいは，言語的活動体系の骨格として存在している。後に示すように，これは法（種子）曼荼羅Vとして相繰り込みされ，さらに体相用を包む新しい存在・訶haカVに再繰り込みされ，「吽humウン」種子で表記されると思われ，特に空海のいう六大の「識」（「吽humウン」種子）は高度に繰り込まれたNAV分別を越えた存在である。

阿ａア字は，法身や「本不生」繰り込みとしてよく捉えられ，阿字観も有名であるが，図の２（後に０に止揚）に相当した「識」の生長点に当たり，源（光放射）のイメージがある。その役割を分担した仏身に変遷の歴史があるが，以下では仏の身口意の向きに着目して仮にその呼称を使っている。

汙ｕウ字を，報身（他受用身）として，禅（定，止，静慮）のもととなる意識⑹V0にあてると，利他や奉仕精神にも相応した不放逸の路V*＝V0－２を描きやすい。また，これは，「夢」や「無意識」の繰り込み点・妙観察pratyaveksa「想」にもなっている。

また，次の麼maマ字は，応身（自受用身）や時には「文化」に代表される化身でもあるが，「果phala」や「智慧・般若prajna」の実相的現象を強調し，マナ識⑺A0にあて，平等性samataや「離言説」の路N*＝２－N3（A0，V1）などと，目的や理想の姿を描くこともできる一方，「ラ火」を意味する「不損減」や「無垢塵」の思考の三角形の頂点にも位置し，△にメタファされることもある。インドにおけるaumアウマの意味と空海のいう字義との対応は，広い識智の止揚の中で想像豊かに捉えられる。

一方，訶haカ字は，「離因業」として，「因hetu」，仏の願い（行），戒，認知（祈り，念），等流，ありのまま，などとの関係が深い。アラヤ識⑻２との連携も特に深いが，前五識⑸の「始まり」由来の意味，行為の源「行」を強調して，賜物N0（A1，V3）にこの点をおいてみる。

無相の三密の念によって，原初の相（変幻自在な２（後に０）からの放射）と，有情の身口意の循環が相応し，さらなる閃きに通じる。２をさらに次元上昇させた０と２でできる辺を「法身」とみなすと，０というシンメトリ中心「阿ａア」に繰り込まれた，「降る源ソース」「地」「中」「海」が絡み取られる。０－２には「理」「法」群が相応しく，N**＝０－A0に「事」「言」群を配置し直すと，有情の「身」の辺N＝N0－N1と，仏の「身」の辺N*（後に拡張されて，羯磨（自性）曼荼羅の面N＝N0－２－V0と「コト」の辺N**）が一対になっている。「理理無碍」「理事無碍」「事事無碍」の表現は，０の自在や，０－２－A0の繰り込み一体化を連想させる。

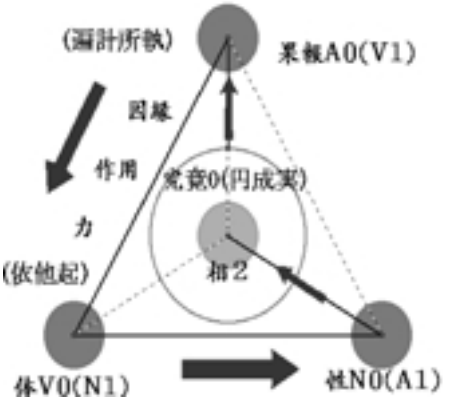
白隠禅師「坐禅和讃」に曰く，
無相の相を相として，行くも帰るも余所ならず，
無念の念を念として，歌うも舞うも法の声。
三昧無礙の空ひろく，四智円明の月さえん。

とさらに，月の光に包まれた無相の相を吟じている。一即一切，一切即一，相即相入の趣きだが，この「無」の意味も，和光同塵や「文」０の「化」を愉しむ，０に止揚のリフレインに違いない。

なお，空海の著書の身口意は，即身成仏義，声字実相義，吽字義といわれるが，まさにそれは，法身ラインからの放射（光，音の波動）に対応し，転法輪は，２（後に０に止揚）を中心とするシンメトリ（平等）配置や法輪の滑らかな回転の表現になっている。

ここで，体など，十如是の路パスと性svabhavaに繰り込まれる三性の位置を，０と２を重ねた（大（観想）曼荼羅NAV）表示に，大まかにマップしてみる。$\underline{A}^{-1}$＝A1－A0パスがないのは，身を托す所，本来の帰るべき場所の向きを示した，境識俱泯の謂いであろう。

また，繋ぐ瑜伽yogaの紲パス，２あるいは０からの意識的な隔離に気づくが，これらは，「慈悲喜捨」「加adhi持sthana」のラインでもある。



空海「即身成仏義」に曰く，
加持とは，如来の大悲と衆生の信心とを表す。
仏日の影，衆生の心水に現ずるを加といい，・・・（如来の大悲）
行者の心水，よく仏日を感ずるを持と名づく。・・・（衆生の信心）

また，世親「倶舎論」に，「信は心清浄の道なり」とあり，専修念仏や修証一処の修行すら，さらに優雅で強固な確信に変えている。また，「以信能入」の言葉は，「信prasada」が極めて重要な上昇のキーであることを再認識させる。「念sati (smrti)」や「帰命namah (namo, namas)」もそれに共鳴する謂いである。ここでは，主体・対象あるいは能所は既に一如に絡め取られている。

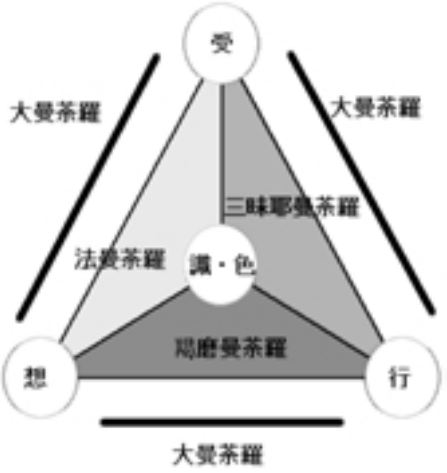
瑜伽の相入（渉入，摂入）Ｖの営みは，$\underline{V}^{*}$＝V0－２（後に$\underline{V}^{**}$＝V0－０）とA*＝２－A1（後に$\underline{A}^{**}$＝０－A1）の路パスを復活開通させる。また，「三密加持して速疾に顕わる」をシンメトリに展開すると，残りの$\underline{N}^{*}$（後に$\underline{N}^{**}$）の比喩，煙（香，薫習習気vasana，兆し，入魂，呪（咒真言）mantra）も，寂滅・涅槃nirvanaの香りを運び，智慧と響応している。これは，０からの信号に同調し，bhrumボロンの響きや声明に，宇宙の波動と連携する「定」「戒」であろう。

さらに，即身成仏義に曰く，
円鏡力の故に実覚智なり

十如是をシンメトリに捉えて，大きな円鏡のように相を実覚し，実践的な智や力や眼を獲得する

実感がある。なお，自利，利他の大きく捉えた２つの道（生き方）については，次に考察する。

5. 四　曼　と　相



曼荼羅とよばれるフラクタル図形表現がある。相を面として捉えた時に，面に投影された曼荼羅フラクタルは相の素晴らしい象徴表現になっている。相を点として捉えた時には，対応する頂点が曼荼羅相に心を繰り込んだカタチ（名体）になっている。相を線として捉えた時には，面のまわりの辺が時にグラデーションをもって輪郭（宗）を見せる。たとえば，見道・信道・修道なども真如へ近づく路パスになっている。「想」を心の相（瞳）とかくように，各種曼荼羅相を示す「名」は，「心０」を反映した影である。

空海は，四曼を相大として，大（maha；仏，本質），羯磨（karma；人間，現象），法（dharma；梵字，言葉），三昧耶（samaya；道具，象徴）をあげている。

これらを思考の正四面体に当てはめてみると，中心２が投影する「私」の身口意をみせる面前スクリーン，$\underline{\underline{\mathrm{NAV}}}$＝N0-A0-V0の大（観想）曼荼羅があり，それに重なってみえる３つの曼荼羅がある。

身体の種子N3（A0，V1）「受」が投影する原初の正三角形は，無意識に隠れる場合の多い下方の，$\underline{\underline{\mathrm{N}}}$＝N0-２-V0の羯磨（自性）曼荼羅で，ここには人工物や果から，様々な記憶や現象が投影・沈殿される。

図の右上方には，左下の心相の種子A3（N1，V0）「想」が$\underline{\underline{\mathrm{A}}}$＝A0-A1-２に気分を投影する，アイテムで描く夢，三昧耶（形像）曼荼羅が展開する。

左上方には，右下の作用の種子V3（N0，A1）「行」が$\underline{\underline{\mathrm{V}}}$＝V0-V1-２に行動規範を投影する，文字や言葉に込められた事相（実践）ともいえる法（種子）曼荼羅が明智vidyaの精神を提供している。

三種世間の捉え方では，順に，有情・器・智正覚とよばれる世間（界dhatu）が対応する。$\underline{\underline{\mathrm{N}}}$・$\underline{\underline{\mathrm{A}}}$・$\underline{\underline{\mathrm{V}}}$に情・意・知，あるいは，エトス・パトス・ロゴスを当てはめるのも有効であろう。西田幾多郎風に，意識界・自然界・叡智界と対応させ，「行」の絶対無や「想」の充実共愉と関連させるのも有意義である。

曼荼羅で有名な他の呼称に両界曼荼羅がある。胎蔵garbha曼荼羅がパトスあるいはエトス色に，金剛vajra曼荼羅がロゴス色にアニマ・アニムスのホログラムを描く。胎蔵は，羯磨以上に生成的な業の側面を，金剛界は，法以上に精神発達的な用・解脱の側面を強調し，用の辺のグラデーション層により，さらにその多様性が表現されている。金胎不二や法性俱融は，$\underline{\mathrm{V}}$*辺の往来活発化による無碍ぼかし，すなわち，母体感覚と実践の一致を信解adhimuktiしているようである。また，十住心の空性無境心，あるいは，それを図解した十牛図の第８図にあるように，浄化のプロセス$\underline{\mathrm{N}}$*あるいは$\underline{\mathrm{N}}$**が，分別された存在の融合を実現し，新しい生に繋がる包括的で生成的な繰り込みになっている。

ここで，実践にあたり，小乗と大乗の意味空間上の差異について考察する。思考の正四面体

を「個」あるいは吾我atmanの観点で捉えると，思考の正三角形に射影した図の中央で，「仏」０と「公」の仮究極２が重なる。大乗的に，これを分けて扱いたい時，「公」２（小我）が「私」のまわりの３点N0，A0，V0とも対称であるような，梵brahman０（大我）が望まれる。

次元繰り込み[15]でふれたように，０が２から新たな次元の向きに分離されると，０と２は容易に役割交代され，麼maマA0に込められた「吾我不可得」が実現され，高次の円融シンメトリに到る。２に関連する辺の重なりやズレは，実は０に止揚を認識していたのだと思考空間が拡張される。これらに関連する仏教用語に，安立・施設・方便・功徳，意便・意言，信解・帰命，般若波羅蜜などがあり，多角的に視点を変えると２と０の違いがくっきり見えてくる。

０に止揚あたりの表現に，生死（輪廻）即涅槃，煩悩即菩提，無明即明，能所一体などがあり，虚無論や相対主義の克服に，高次にシンメトリな「相」が提供される。また，思考の正四面体の回転によって，「私（自や他）」と「公（共や諸仏）」を対称に捉えて，必要な課題を考察することも，新しい社会に参画する態度の育成にとって有効になる。次に，思考の正四面体の各頂点と中心の意味を確認しながら，自然の流れや並び順に注意して，いくつかの言葉の５つ組を重ねて探っていく。

6. 五　蘊　と　相

味覚の四面体のように，思考の正四面体に距離と路パスを設定し，識智の上流順に並び替えてみる。基本配置は空海の般若心経秘鍵を基にし，陰陽五行や「相」の熟語で重ね塗りする。頂点に純色の配置を試みると，陰陽五行にある相互関係も示唆を与える。とりあえず，思考の正三角形的に，０と２を同一視してみると解りやすい。天動説ともいえる陰陽五行の循環流の趣きに対し，地動説にあたる識智の上昇は，自然の流れを遡る行為とみなされる。なお，「空」の「青（一切色）」が，ダークマターやダークエネルギー，夕暮れや夜空も含む「まだら色」を想起させて，「無」ではなく豊かな色（艶）を見せる。これが，aumアウマやbhrumボロンに連なるグランブルーなのかも知れない。また，五大・秘鍵行は，思考の分別・融合過程を示していて，対立する２相の融合を振り出しに戻ってダイナミックに捉え直す趣きがあり，後にその路パスを辿る。

頂点	０の止揚	２	A0（N3，V1）	V0（A3，N1）	N0（A1，V3）
識	アマラ⑼	アラヤ⑻	マナ⑺	意⑹	前五⑸
智	法界体性	大円鏡	平等性	妙観察	成所作
方角	中央	東	南	西	北
季節	中央	春	夏	秋	冬
五色	黄	青（一切色）	赤	白	黒（無色）
五蘊* 種子	色 名体・相繰り込み	識 ア・ウマカ	受 マ・アウカ	想 ウ・アマカ	行 カ・アウマ
五大**	阿ア地	佉キャ空	羅ラ火	嚩バ水	訶カ風
秘鍵	建（普賢）	一（観音）	相（弥勒）	絶（文殊）	二（二乗）
性（例）	ａ本不生， 無碍	⒜等虚空， 堅，仮有	ma無垢塵， 煙	ｕ離言説， 湿	ha離因業， 動
五行対応	土	木	火	金	水

*　「秘密集会」曼荼羅（ジュニャーナパーダ流[18]）
　表現例：受（身体，平等性），想（心相，三昧，妙観察），行（作用，行動，成所作）
**善無畏三蔵・伝

陰陽五行では，火と金（A0-V0）間で，土０を経由する。十如是あるいは五蘊では，相と果（２-A0）間で究竟０を経由する。五大あるいは般若心経秘鍵では，中央の法界体性智０を，成所作智と大円鏡智（２-V0）間で経由する。この差分は，シンメトリの捉え方では，ちょうど峠点０を通る経路積分の評価に相当している。この差の由来は，既に成所作智における行動の種子V̿や妙観察三昧の種子A̿にあり，声聞や縁覚の差のみならず，自他，主客，能所，機根，応報，正依，欲性，因果，行願，教学，縁相などの二律背反を解消する答ともなっている。言の葉の両面で色が異なるのみという感覚もあるが，モノ・コト・ココロをトータルに見る訓練や評価も必要となり，大域的な判断に対する幾何（図解）の意義もここに存在する。

これらの差をそれぞれ例えてみると，灰化プロセスA0-V0，命を孕むプロセス２-A0，記憶の蔵alaya阿頼耶２と出発駅V0を結ぶ銀河鉄道の第４時メディア中継駅などとメタファされる。また，０への中継は，０に漸近する思考の正四面体内部へのパスのグラデーションにみえる。０は生命体の碇，トポス，源と対応しており，空（N）・仮（A）・中（V）という意味空間の引力場となり，中心０を意識すると，路パスは屈折を余儀なくされる。時に，「仮２」に着目し，０と２の重なりを対称性の破れとして分離し，さらなる次元上昇の旅に出発するのも有効であろう。般若心経の「是故空（N）中（V）」は，まさに，心経の意味する通り，中心hrdaya０を貫く帰命「信」に見える。中（V）は拘りのない，しなやかさの根源であり，仮（A）は「観」の三昧趣，「幸福」の秘訣になっている。

なお，十如是の「因-作-力」の用の並びがV1-V0間にくると思われるが，陰陽五行では，火V1と金V0の間で土０を経由している点が興味深い。通常の用ライン上のみかけの因縁や作用や力と業や羯磨との関連（味付け，エピソード）を再認識させる。「土を離れては生きていけない」の科白が思い浮かび，「土」偏の字に郷愁が蘇る。なお，V̿＝V0-V1-２面は，法（種子）曼荼羅として認識され，心０を含みつつ，成所作krtya-anusthana智として行動の種子V3(A1, N0)に繰り込まれていた。心を込めると，「苦」も「律」もまだらに絶妙の輝きを増すという偈も納得である。

ところで，上の表の並びは，護法の四分における相分（用）と一致する。すなわち，頂点まわりの自証分に対して，出力側の表右差分を見分，入力側の表左差分を相分とみると，

⑸の相分（用）；N̲＝N0-N1；五境（香味触臭視聴）

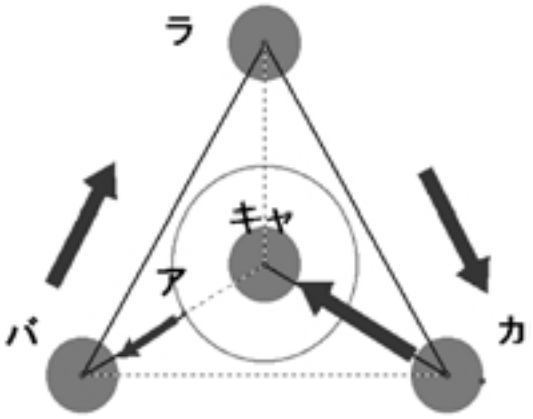
⑹の相分（用）；V̲＝V0-V1；一切法（広い科学dharma）

⑺の相分（用）；A̲＝A0-２；⑻の見分（寂滅，涅槃）

⑻の相分（用）；２(-０)-A1；器界（環境，メディア，三昧）の輪郭エッジ

となろう。ここで，⑺の相分は，人工と自然の差分に見え，「滅」という表現にいずれ滅びる運命を感じさせる。同様にして，これらの典型的なパスは，「苦」「集」「滅」「道」を表現している。一方，相分から分離された「証自証分」とよばれる間主観的な関係は，V̲*＝V0-２(-０)に連動するA0-２(-０)-A1の弦のような，離れて伝わる共鳴関係を想起させる。仏国土０への化生すなわち往生と，作品から受ける強烈な感動が響応し，マニmani・天鼓の色・声明を三昧耶曼荼羅空間に現出している。往相および還相は，回向parinamaパスをさらに，２（公）から０（仏）に飛翔させる。一心は本居であり，折口信夫は，「マレビト（客）は音連れる」と謂い，正法眼蔵の「知足」を加えると，既に「満」の域に達している。有情の五蘊に心を込めた言葉を添えると，「色」は面前のスペクタクル，「受」は命の授かり，「想」はイマジン，「行」は元気・勇気，「識」は凝集させる性に止揚される。

7. 路　1　と　相



地水火風空を象徴する胎蔵大日如来真言アビラウンケン（五大アバラカキャ）の響きを繋ぐ路と，それによって形成される相を，空海の声字実相義および秘鍵「建絶相二一」さらにその実践編である「秘蔵宝鑰」をもとに辿ってみる。この路パスの肝が「訶カ（無色，無相）」にあるのは，前出の通りである。

アa：0は「本不生」とよばれる生長点で，精神の故郷Toposや春の暖かい仏母につながる無限のイノチのイメージがある。慈悲あるいは母子相関作用エントレインメントは0-N0(A1，V3)と関係が深く，エトスや心の痛みの由来「戒」のポートとみなされる。戒は他律のイメージが強いが，「気づき」や念に連動する，むしろ自律的な「徳」や「倫」のソースとみなすべきであろう。

バva：V0(A3，N1)は「離言説」とよばれ，表現を超えた「離」や多様なやり方のイメージがあり，場ステージに絶景パノラマを投影している。「離言の言」，「離見の見」なども，日々の行為Vの営みに0や2への引力のグラデーションを想起させる。

ラra：A0(N3，V1)は「無垢塵」とよばれ，清浄な存在になるイメージがある。「業」を立ち上げ完遂する過程で汚れを感じても，最終的に浄化される感覚が魂の救済になっている。右方に目を転じると，固く目的に向かって自己を厳しく律する以外にも生き方があり，共に愉しむことの再発見や地や宇宙への感動が，次の柔軟性や自在性に繋がっている。味を見分ける「果可分」の重要性は，教育の意義，創造性や動機の持続にも深く関連している。

カha：N0(A1，V3)は「離因業」とよばれ，想像を絶する意図が含まれていることを確認する。0からの路で既に，解決パスを暗示されている。心豊かに過ごすヒントは，人生の始めに与えられている比喩になっている。砂場体験のような，早期の感覚教育の重要性が再認識される。たとえば，「幸」を探すのをやめたら，而今（いまここ）にあったという記述は，「訶カ」を指していると思われる。「無」の故に，ここは，ヒエロファニー（聖体示現）やゾーエー（永遠の命，火の鳥など）の口承伝説の生まれる位置でもあろう。

キャkha：2は「等虚空」とよばれ，変幻自在なイメージを与えてくれる。分散された智（仏）がシンメトリに配置され，全体として，空（N）・仮（A）・中（V）を形成しているのを確認すると，アラヤ識⑻を脱皮し，さらに大きな一つの「アマラ識⑼」に繋がる。この位置には「聖arya」が相応しく，白川静によると，「令」「気」「降」などの字源に古代人の念いが留められている。

メディアは，アラヤ識⑻に深く関わり「陰」と「陽」を統合した意味合いがあるが，マナ識⑺を形式的な「明」「顕」あるいは「形式知」とみなすと，意識⑹と前五識⑸を「暗」「隠」「秘」「密」あるいは「暗黙知」とみなすこともできる。

ナレッジナビゲーションの優れた手法[17]の例で，「共同化⑹」「表出化⑺」「連結化⑸」「内面化⑻」の識とみると，「（建）絶相二一」プロセスのダイナミックな実践とも捉えられる。この二重螺旋的発達の循環[14]においても，逆観・還相の習慣化，足場かけや反省（内省，外省）や

ネットワーク化が，体の健全化，免疫化，魂の救済をもたらしている。６識を分別，５識を融合の識とし，８識をポートフォリオ蔵とみると捉えやすい。７識は，評価・鑑賞・反省の「ラ火」過程に対応し，芸術論や創造性への取り組みにも示唆を与える。道元の「眼横鼻直」の謂いは，まさに，眼の回りの二重螺旋（ありのまま）に対応し，心（０に止揚）を包んでおり，両眼図[14] にもマップされている。まさに預言「咒」には，智慧の軸の周りに，シンメトリな「私」と「仏」の二つの「口」が賦与されている。このことは，右脳・左脳の役割分担を含む脳の進化と識の上昇との関連を示唆している。

8. 路　2　と　相

ここで，いくつか，識の上昇に着目して，路を連想させる言葉を，思考の正四面体に同様に当てはめてみる。

略号	識	心経	五蘊	五智	五大	秘鍵		親鸞	法華		三密			四諦	八正道		波羅蜜			別称
O	9	時	色	法界体性	ア	(理)	文	(信)							(見)	(念)				実,音連れ
N0	5	因	行	成所作	カ	教	義	教	開	真	身	口	因	苦	命	思惟	戒	忍辱	願	徳,情,祈,後生
V0	6	行	想	妙観察	バ	行	忍	行	示	善	口	意	行	集	定	精進	定	精進	力	ウ,功,離,知
A0	7	証	受	平等性	ラ	果	呪	証	悟	美	意	身	果	滅	業	語	慧	布施	智	マ,福,コト,幸
2	8	入	識	大円鏡	キャ	理		信	入	聖				道	見	念			方便	(ア),霊魂,客,声
注		環	種	種	種	放	放	放	放	環	環	放	環	環	環	環	放	環	放	

略号注：種＝種子，曼荼羅繰り込み的体
　　放＝２あるいは０からの放射光的用，環＝そこを起点とした循環的用，

波羅蜜に，六と十があり，これはまさに，正四面体の辺の数と，中心から各頂点に引いた辺を足した数になっている。八正道は，四諦の補足と捉えるとよく対応する。

持戒sila，禅定dhyana，智慧prajna，忍辱ksanti，精進virya，布施dana，
願pranidhana，智jnana，力bala，方便upaya

真言「オンボクケンom bhuh kham」は，五大panca-dhatavah「アバラカキャa-va-ra-ha-kha（胎蔵大日如来真言アビラウンケンa-vi-ra-hum-kham）」の相補というよりも，omアウマ繰り込みの観点からは，重ね絵のようである。「唵オン」は，０の深い意味を込め，月や北極星のようなゆるがないイノチのイメージを持つ。「bhuhボク」には，「地」「歩」「僕」「渤」などが当てられ，「私」の立つ前景の大地（５，６識）を彷彿させる。「khamケン」「khaキャ」には，「空」「欠」「佉」などが当てられ，虚空蔵２を連想させる。７識の相が静かに０に帰命している雰囲気がある。

シンメトリな円満「福」は，「苦集」に歪んだ相を共に愉しい幸「福」の大曼荼羅に変える，波羅蜜が総合連携した相といわれ，智慧の周りに止shamataされ，より確かとなる。「徳」もその蛍光色となり，夢カタチの「生まれる」住居vihraビハーラを提供することだろう。八正道の「正見」は，「心解脱」ともよばれ，「正念」と合わせ，思考の正四面体の心の瞳０に位置している。「正念」は，大悲に重なる集中した大心でもあり，さらに高次元に飛翔する。また，「空２」の湾曲あるいは自在は，「命」「定」「語」を保障する，巧みさの妙となる。「正思惟」は，時には「身」を捨ててでも「美」に連なる意味合いを持っていると伝えられる。

クリティカルシンキングや「何？」「どうやって？」什麼・怎麼という因・作・力の追究も，「吾唯知足」の諦観を念頭に置き，「これでいいのだ！」恁麼を心がけると，弛まない「精進」や済度の願いに繋がると思える。０からの言や音（声）の響きmantraが，信解という三昧境地の有頂天を展望させる。応供arhatも還相回向の路を目指し，西V0から東２に架かる虹の橋に，銀河鉄道や「鵲」のイメージを重ねて，マジックアワーのまんだら色を甘受できる。リサ・ランドールの現代物理のいう異次元の世界[19] も意外とパラレルに存在して，イデアの世界と重なったり，新しい思考概念をカタチに焦点化させるだろう。

9. お わ り に

「私の中に（木に隠れた）仏がいる」という発見は，密厳に価するだろうか。「公」もそうだが，「ム」象徴記号は，風通しがよく，しかも，「松」のように流れを楽しむ感がある。「忍」や「度」や「居」などにどんなストーリを描くか，字源を辿るのも愉しい。かつてそれに，「言」や「水」や「手」などを組み合わせて念いを伝えたように，本論文では，思考の正四面体さらにはその止揚に「相」を描き，意味（心）を繰り込むプロトタイプを提案した。

最近話題の，「学士力」「情報教育の３本柱」「ICT活用指導力」，さらには，これからを「生きる力」も，大局的なマップなしでは足許がおぼつかない。「活用」を「行」，「指導」を「教」と置き換えてみると，すでに解決のヒントは，密教・唯識をはじめとする（大乗）仏教哲学などに与えられている。「相」の言葉で綴ると，大いなる存在の声が聴こえ，横たわる困難の河を渡れそうな気がしてくる。また，「言」の字源は神聖なソースを感じさせ，「認知」から始まる行動の智慧が観えてきて，まさしく，シンメトリな法輪は行動の羅針盤になっている。五智の灯台は行く手を照らし，心に描く満月は時空・宇宙を超えてすべてを包み込んでいる。私たちの心の本「居」ビハーラに優しく手を「据」え，生きる根拠をさらに確かにできる。

世界の「世」の廿棒が各「せ」の繰り込みになっているように，世界曼荼羅の渦が小さな命も平等に絡め取っている。すべてが繋がり，華開いている世界観・人間観に導かれ連なることを，黄昏まんだら色からダークブルーに沈んでいく途中でさえ，「信」じ，托す済世の路パスがある。まさに「教」の根拠は，「謙虚で優雅な実践力のある人」のように表現される「成所作」にあった。ますますしなやかに，品格という名に恥じない生き方と，時には，渾身の力も発揮したいものである。これからとして，「公」と「私」をシンメトリに展開することもできそうである。また，０近辺に見え隠れする「証」というオントロジーの星々も気にかかっている。ユビキタスの時代，込められた「誰でも」という願いとその「教」の行方を，今しばらく，追ってゆこうと想っている。

参 考 文 献

1) 空海著宮坂宥勝解釈：空海コレクションI・II，ちくま書房（2004）
2) 吉田裕午：紋様における繰り込み概念の形成と組織化，広島文教女子大学紀要　27/，7-18（1992）
3) 吉田裕午：繰り込みによる直観的理解の意味，広島文教女子大学紀要　28/，167-176（1993）
4) 吉田裕午：教育情報における繰り込み概念の意味，教育情報研究　9/1，23-32（1993）
5) 吉田裕午：教育情報における三角（参画）型繰り込み，広島文教女子大学紀要　29/，213-223（1994）
6) 吉田裕午：動的幾何繰り込みと知の組織化，広島文教女子大学紀要　30/，175-185（1995）
7) 吉田裕午：相対論における繰り込み概念，広島文教女子大学紀要　31/，157-169（1996）
8) 吉田裕午：射影としての繰り込み概念，広島文教女子大学紀要　32/，191-200（1997）
9) 吉田裕午：よみの繰り込み，広島文教女子大学紀要　33/，143-153（1998）
10) 吉田裕午：過渡現象の繰り込み，広島文教女子大学紀要　34/，11-23（1999）

11)　吉田裕午：記憶という繰り込み，広島文教女子大学紀要　35/，103-112（2000）
12)　吉田裕午：相対論的繰り込み，広島文教女子大学紀要　36/，53-62（2001）
13)　吉田裕午：吽字義繰り込み，広島文教女子大学紀要　40/，53-62（2005）
14)　吉田裕午：エントレインメント繰り込み，広島文教女子大学紀要　41/，31-44（2006）
15)　吉田裕午：進化という繰り込み，広島文教女子大学紀要　42/，15-24（2007）
16)　吉田裕午：次元繰り込み，広島文教女子大学紀要　43/，41-52（2008）
17)　私情協：大学教育・情報戦略大会要旨集，　106（2006）
18)　高野山大学選書刊行会編：高野山大学選書　4，93（2006）
19)　リサ・ランドール他：異次元は存在する，日本放送出版協会（2007）

―平成21年10月29日　受理―